

高校における「朝の読書」 模索と課題

宮脇 隆志
(全国朝の読書連絡会)

【要旨】

神奈川の県立高校で「朝の読書」の実践に取り組み、普及にもつとめてきたなかで得た教訓を整理した。それは、「朝の読書」の原則、高校における動機と効果、実施率の低さ、その低さの原因などである。次に、高校における普及のポイント、読書の秩序づくりの重要性、授業をとおしての本の紹介、教育活動のなかでのさまざまな読書活動についてまとめた。特に地歴・公民科、国語科、家庭科、情報科などの授業での具体例をあげた。特に新しく注目できる活動は、ビブリオバトルである。また、高校における「朝の読書」の実施率が全国一低い神奈川県において、普及に取り組んでいる「神奈川県朝の読書連絡会」の現状も報告する。

1 はじめに

筆者は、18年間にわたって神奈川県立大沢高校（現・相模原総合高校）および県立厚木東高校において「朝の読書」を導入し実践してきた。それをとおして得られた教訓を整理すると、以下のようなものになる¹⁾。

(1) 「朝の読書」および「黙読の時間」の原則

「朝の読書」の4原則	「黙読の時間」の原則
① 「毎日やる」	「一定の時間だけ」
② 「好きな本でよい」	「読む本は子ども自身に選ばせる」
③ 「みんなでやる」	「教師や親も、読むことで手本をしめす」
④ 「ただ読むだけ」	「感想文や記録のたぐいはいっさい求めない」

(2) 原則がかかえている問題点

- ① 学校現場では、10～15分の「一定の時間」を確保すること自体がなかなか難しい。
- ② 好きな本を選べない生徒、何を読んだらいいのかわからない生徒が多い。
- ③ 教師と一緒に本を読んだからといって、すべての生徒が本を読むようになるとはかぎらない。
- ④ ただ読ませておくだけの実践に陥りやすい。

(3) 高校で「朝の読書」を導入する主な動機

- ① 生徒たちに読書の習慣をつけたい。
- ② 遅刻をなくしたい、学校生活を落ち着いた始まりにしたいなど生活指導面から。

③ 「受験力は国語力、国語力の基本は読書力」という進路指導・学習指導面から。

(4) 高校での「朝の読書」の主な効果

- ① ほとんどの生徒が毎日、本に触れることにより「読書の習慣」をつけるきっかけとなる。「読書の時間」以外にも本を読む生徒が確実に増える。
- ② 学校生活が静寂から始まり、遅刻が激減する。「荒れた学校」が「落ち着いた学校」になる例も多い。
- ③ 文章を読むことに対する抵抗感がなくなり、学習面・進路指導面にも効果がある。

(5) 「朝の読書」導入に対する2つの壁

- ① 「教職員の壁」 読書は強制して行うものではない等の教職員の反対。
- ② 「時間の壁」 時間設定が難しいこと。

(6) 「朝の読書」の実施校・実施率 全国の小中高校 計 27,798 校 (74%)

(朝の読書推進協議会ホームページより 2013 年 11 月 25 日現在)

全国 小学校 17,035 校 (79%) 中学校 8,574 校 (80%) 高校 2,189 校 (49%)
神奈川 小学校 630 校 (71%) 中学校 339 校 (66%) 高校 43 校 (18%)

(7) 高校での低実施率の都道府県 (30%未満)

神奈川県 18%	大阪府 19%	埼玉県 21%	千葉県 23%
京都府 23%	新潟県 23%	東京都 26%	

2 高校における「朝の読書」の普及

現在、「朝の読書」が普及し定着してきているため、ブームとなっていた時期とは異なり、マスコミなどで大きく報道されることは少ない。

実施率の低い都市部の高校においては、「朝の読書」の意義と効果、導入の方法などを宣伝し普及していくことが課題である。高校教職員向けの入門講座や、「導入の手引き」(パンフ)の作成などが必要であろう。その内容を整理すると、以下のようなものとなる。

(1) 読書実態の調査と読書の必要性の論議

パソコンやスマートフォンなどの普及によって、大学生の読書時間が減少しているという。社会の急激な変化に対してじっくり考え行動していく人間を育成していくためには、高校教育の目標の一つに読書力の育成をおくことが大切である。高校生の読書実態を調査し、それをふまえた論議を高校の現場で起こしていく必要がある。

(2) 読む能力の「技能」としてのとらえ方

読書力は、スポーツと同じで繰り返し行うことによって獲得される能力である。読書は、慣れるまでには一定の時間がかかる。読むことを「技能」ととらえて、毎日訓練する時間を保障するのが、「朝の読書」である。

(3) 「朝の読書」の効果

高校に「朝の読書」を普及するためには意義だけではなく、その具体的な効果を伝えることが必要である。繰り返しになるようであるが、これまでの実践による効果は、以下のことがあげられる。

① 読書の習慣づくりに最適な方法である。

本が嫌いな生徒、読書習慣のない生徒も、毎日必ず本に接することによって、読書の習慣が確実に形成される。

② 生活指導の上で、絶大な効果がある。

学校生活が静寂のなかで始まる。生徒たちがそれぞれ本に向き合い、本との対話を行う。読書の時間の終了の後、諸連絡を静かに聞くことができるようになる。

1校時目の授業の始まりもスムーズになる。遅刻指導も併せて行えば、遅刻が激減する。

③ 学習指導に効果的である。

文字を読むことへの抵抗感が少なくなり、本に対する関心が強くなる。そして、語彙力・想像力・集中力・文章力などが培われる。

④ 進路指導に役立つ。

受験力の基本は国語力であり、国語力を伸ばすのに読書は大きな効果がある。大学等への進学後の自己学習力も育てる。

⑤ 生涯学習の力を育てる。

読書力の形成は、生涯をととしての自己学習力を培う。

3 「朝の読書」の秩序・環境づくりの重要性

高校においては「朝の読書」を導入したもの、落ち着いた読書環境がつかれず、読書どころではないという例が少なくなかった。生徒が本を持ってこない、本を読もうとしない、宿題など別なことをしている、私語がたえない、遅刻が多くて読書どころではない、などである。

「朝の読書」に対する教師集団の意思統一が充分でなければ、クラスや学年によって温度差が生じる。その結果、読書に取り組むクラスがある一方で、騒々しいクラスも出てくる。そのような状況をなくすために、以下の二つの方法が生み出された。

(1) 「総合的な学習の時間」の一部に組み込む方式

「朝の読書」を「総合的な学習の時間」という授業にすることによって、教師も生徒も姿勢が変化する。生徒は、単位の認定、つまり進級・卒業にかかわるために真剣になる。すべてのクラスで同じ時間帯に行われる授業であるために、教師の足並みも揃うようになる。授業として行う場合、以下のようなことを踏まえる必要がある。

① 「朝の読書」が「総合的な学習の時間」の一部として認められるための条件は、教育目標・年間計画・評価をそなえていることである。

② 「朝の読書」単独では「総合的な学習の時間」として認められない。

③ 単位認定の計算方法は、「朝の読書」を週あたり 10 分×5 日間=50 分=1 単位相

当と計算する。この場合、時間割の中に組み込まれた「総合的な学習の時間」の1時間と「朝の読書」の1時間相当を合計して「総合的な学習の時間」2単位とみなされる。3年間で6単位となる。

- ④ 遅刻・欠席が多いために履修が困難と予想される生徒に対しては補習などを行う。生活指導としての遅刻指導もきちんと行わなければ、補習のために教職員の負担が大きくなってしまう。

(2) 担任・副担任の2人体制での指導

担任1人では指導が難しいという高校も存在する。その場合、「朝の読書」の時間に担任・副担任の2人で教室に行き指導にあたるとスムーズにいく。

ただし、私立高校は教員定数が少ないため、1クラスに1人の副担任が困難なので、その他の工夫が必要である。

厚木東高校では、担任の負担を軽減するために、「朝の読書」の時間の監督および成績処理などは副担任が行った。

4 授業のなかでの本の紹介

「好きな本でよい」「本の選択は子ども自身にまかせる」ということが、「朝の読書」の原則であり、そのことが生徒たちの読書への意欲を大きくしている。しかし、「何を読んだらよいかわからない」という生徒も多い。その解決策の一つが、授業のなかで絶えず本を紹介することである。私の場合は、「現代社会」および「日本史B」の授業で、次のような本の紹介を行った。

(1) 「現代社会」の授業

初めて「朝の読書」に取り組んだ大沢高校・相模原総合高校(1993～2005年在職)では、何を読んだらいいかわからないという生徒たちがきわめて多かった。そこで、「現代社会」(2単位)の授業ではあったけれども、毎時間の授業の最初に、B5版のプリント両面に本の抜粋を印刷して紹介することに努めた。読みやすそうな本、おもしろいと思われる本を探し、続きを読みたいくなるようなところを抜粋した。

出版社から寄贈された文庫本、テレビドラマやマンガなどで話題になった作品が多くなった。なかには生徒から勧められた本もある。以下のような作品だが、手当たり次第に紹介したものであって、系統性は全くない。

『学校の怪談』(岡崎弘明)『いきもの図鑑』(さくらももこ)『リング』(鈴木光司)
『こちら救命センター』(浜辺祐一)『いちご同盟』(三田誠広)
『五体不満足』(乙武洋匡)『古畑任三郎』(三谷幸喜)『たけしくん ハイ!』(北野武)
『鉄道員』(浅田次郎)『鼻・杜子春』(芥川龍之介)『坊っちゃん』(夏目漱石)
『ロードス島戦記』(水野良)『アルジャーノンに花束を』(ダニエル・キイス)
『影との戦い ゲド戦記I』(ル・グイン)『モモ』(ミヒャエル・エンデ)
『少年H』(妹尾河童)『未来イソップ』(星新一)『もう一度デジャ・ヴ』(村山由佳)
『子どもにウケる科学手品』(後藤道夫)『銃口』(三浦綾子)『トラちゃん』(群ようこ)

『ゼロ弾きのゴーシュ』（宮沢賢治）『燃えよ剣』（司馬遼太郎）
『葉っぱのフレディ』（レオ・バスカーリア）『時をかける少女』（筒井康隆）
『翼をください』（ジュークス三木）『木を植えた男』（ジャン・ジオノ）
『スレイヤーズ』（神坂一）『橋のない川』（住井すゑ）
『剣客商売 辻斬り』（池波正太郎）『星の王子さま』（サン・テグジュペリ）
『三毛猫ホームズのクリスマス』（赤川次郎）『絶対安全エージェント』（大沢在昌）
『ショージ君の面白半分』（東海林さだお）『幻色江戸ごよみ』（宮部みゆき）
『雨あがる』（山本周五郎）『さらば悲しみの性』（河野美代子）など。

(2) 「日本史 B」の授業での古典作品の紹介

厚木東高校（2005～2012 年在職）では、大学に進学する生徒が多かったので、日本史の教科書の文化史に登場する古典作品の紹介に力を入れた。古典の内容から日本史に興味をもたせると同時に、物語への関心から読書にすすむことをねらいとした。

ストーリーのおもしろさを実感させるために、『21 世紀版少年少女古典文学館』などのダイジェスト版も活用した。なお、近代文学の作品は原文のまま紹介した。また、アニメ化された作品を映像で見せることも多く行った。教科書に出てくるほぼ全作品について、簡単な作品紹介を印刷して配布した。

以下は、とくに時間を割いて授業の中で扱った作品の例である。

【前近代の授業】

『古事記』・『伊勢物語』・『源氏物語』・『今昔物語集』（芥川龍之介『鼻』・『羅生門』も紹介）・『平家物語』（小泉八雲「耳なし芳一」も紹介）・『太平記』・『御伽草子』など。

【近現代史の授業】

『たけくらべ』・『蒲団』・『破壊』・『高野聖』・『坊っちゃん』・『伊豆の踊子』
『グスコーブドリの伝記』・『風ニモマケズ』・『生きてゐる兵隊』・『蟹工船』
『真空地帯』など。

5 教育活動全体のなかでのさまざまな読書活動

「朝の読書」は「ただ読むだけ」という原則から、「読ませるだけ」という実践に陥りがちである。「朝の読書」が生きた実践になるためには、学校の教育活動全体のなかで、読書にかかわる活動を多面的に展開することが重要である。

(1) 「国語総合」の「読書ノート」

厚木東高校では、「朝の読書」とは別に「国語総合」の授業で、1 年生に「読書ノート」を記録させ、毎月、提出させる実践が行われていた。毎月提示される課題図書の中から 1 冊選び、読了後、ノートの見開き 2 ページに次のようなことを記録する。

①作品名、②作者名、③出版社名、出版年月、④入手先、⑤選択理由、⑥気に入った表現・セリフの抜粋、⑦一言感想。

国語の授業として次々に課題図書が出されるので、生徒たちはさまざまなジャンルの本と出合うことになる。「朝の読書」で本を読む習慣が培われていることも、「国語

総合」の課題をやりやすくしていると思われた。同時に、これらの課題図書は、「朝の読書」を内容面から豊かにするものとなっていた。

「国語総合」の授業で提示された課題図書の作者・作品は、以下のとおりである。

【課題図書の作者・作品】

4月	本校図書館からハードカバーの本を借りる	
5月	二人の女性作家を読もう	吉本ばなな・山田詠美
6月	二人のミステリー作家を読もう	宮部みゆき・東野圭吾
7・8月	二人の小説を読もう	村上春樹・村上龍
9月	現代小説を味わおう	宮本輝・浅田次郎・川上弘美・小川洋子
10月	近代短編作家	太宰治・芥川龍之介
11月	日本のファンタジー	梨木香歩・宮沢賢治
12月	歴史小説を読もう	司馬遼太郎・山本周五郎
1月	詩集を読もう	萩原朔太郎・高村光太郎・宮沢賢治 中原中也・三好達治・金子光晴
2月	本格ミステリーを読もう	松本清張・森村誠一・北村薫
3月	外国のファンタジーを読もう	『ムーミンシリーズ』・『モモ』・『星の王子さま』『みどりのゆび』 『くまのプーさん』・『ダレン・シャン』『風に乗ってきたメアリ・ポピンズ』 『不思議の国のアリス』・『オズの魔法使い』

(2) 国語の授業などでのブックトーク・ビブリオバトル

これまで国語の授業などでブックトークが行われてきた。近年、ビブリオバトルを取り入れる実践が増えてきている。ビブリオバトルとは、自分が気に入った本の書評を3～5分間で発表し、それを聞いた生徒たちがもっとも読みたいと思った本の発表者に投票するものである。クラスごとに代表を出し、学年単位や全校規模で競うことも行われている。

「朝の読書」が行われている学校では、すべての生徒がビブリオバトルの当事者になることができる。本好きな一部の生徒だけのものではなくなる。また、発表された本が、聞き手の生徒たちの読書意欲をかきたて、「朝の読書」を充実させるうえでも効果的である。

(3) 家庭科「幼児教育」における「読み聞かせ」の実践

相模原総合高校では、家庭科「幼児教育」の授業の一環として、生徒たちが高校近くの小学校に出かけ、児童に本の「読み聞かせ」を行っていた。

(4) 「情報」の授業

「情報」の「パワーポイント」の授業で、生徒が選んだ1冊の本の紹介を行わせている事例もある。

(5) 図書委員会広報の活用

厚木東高校の図書委員会広報『ブックナビ』では、教職員・生徒によるお勧めの本の紹介を行っていた。教職員の場合には、推薦者本人の写真も掲載して、生徒たちに親しみやすいものとしていた。毎月1回発行し、「読書の時間」にまず『ブックナビ』に目を通してから、通常の読書に入るようにした。

6 神奈川県朝の読書連絡会の活動

神奈川県朝の読書連絡会は、高校における実施率が全国最下位の状態が続いているために、長年にわたって高校での普及に力を注いできた。現在は、小中高校すべてを対象とした活動になっているが、その現状と課題は以下のとおりである。

(1) 研究発表会

連絡会では、毎年夏休みに研究発表会を行っている。およそ10年間は、高校の教師だけの交流であったが、2011年から小中高の実践発表と校種別の分科会とを設けることができるようになった。現在、第4回研究発表会の準備中である。県下のすべての高校宛てに案内を発送し、また小中学校へは教育事務所・教育委員会を訪問し配布をお願いしている。保護者・図書館関係者・出版関係者・学生など一般の参加者の方もみられるようになった。

(2) 連絡会の組織の確立

長年のあいだ会員は、実質的には高校の教諭2人であった。一昨年より、会長に現職の校長（高校）、副会長に現職の教頭（高校）をむかえることができた。また、複数の高校の教員・司書、小学校教員・出版関係者が会員として参加することになり、あわせて十数名の会員となった。

さらに、神奈川県西部のある市の、元教育長だった方の助言を得て活動するようになった。それ以来、小中学校を含めた幅広い活動に発展してきている。

連絡会の活動が盛んな都県は、一般教職員だけでなく管理職の会員が大きな役割を果たしている。東京都や埼玉県などはその例である。長崎県は、教育委員会に在職したことのある元校長の影響力が大きい。このように、管理職・一般教員・司書・教育行政関係者などが参加していることが重要である。

(3) 会報の発行、文学散歩

2012年9月に、会報「ファンタージェン」の発行を開始した。年2回の発行とし、その内容は夏の研究発表会と春の文学散歩の報告が中心になっている。

会の親睦活動として、年1回、文学散歩を始めた。2013年2月には、小田原の曾我梅林と太宰治・尾崎行雄・松尾芭蕉の足跡を訪ねた。2014年3月には、鎌倉文学散歩を実施した。鎌倉近代文学館の見学を中心とし、吉屋信子邸や川端康成邸などの周辺も歩いた。

(4) 会のかかえる課題

年1回の研究発表会を行う上で、二百数十校の高校への案内のメール代、県下の教

育事務所・教育委員会を通しての案内ちらしにかかる用紙代・印刷代・交通費などの捻出に汲々としている。会員個人の出費の負担も大きい。助成金の申請もいくつか行ったが、残念ながら不採択に終わった。また、インターネットの活用などに堪能な会員がいないことも悩みである。

7 さいごに

「朝の読書」を始めた最初の5年間、大沢高校では「朝の読書」は学校全体として成立することはなかった。「総合的な学習の時間」の一部に位置づけて初めて成立した。この方式で「朝の読書」を導入した高校は、私の知る範囲で十数校を数える。この10年間に神奈川県公立高校での「朝の読書」の実施校も1校から14校に増えたが、まだ1割程度にすぎない。

2013年度の研究発表会の案内を出した際に、高校二百数十校にアンケートをお願いした。その結果、実施していると回答した高校は15校だった。なお、朝の読書推進協議会の調査では、43校である。アンケートに対して、「実施を検討中である」と答えた高校や「関心がある」と答えた高校も数校あった。今後、1校ずつでも「朝の読書」の実施校を増やしていくために努力していきたい。

本稿を準備していた2013年12月、「朝の読書」の創始者である林公氏のご逝去された。林公氏は、全国の小中高への普及にずっと努力されてきた。「朝の読書」を生み出し、それを全国の小中高の7割にまで広げることができたのは、ひとえに林氏の着想・情熱・意志によるものである。私も林氏の励ましに支えられてここまでやってきた。深い感謝と共に心よりご冥福をお祈りしたい。

注記・引用文献

- 1) 宮脇隆志「高校における『朝の読書』－18年間取り組んで－」（『日本生涯教育学会論集』34、PP115－124、2013）